宮崎日日新聞 2009年11月23日(月)

客論

神楽通し土地の魅力知る

地域支援コーディネーター 福永 栄子

黄金色に輝いていた稲も刈り取られ、掛け干しの風景も終わった。早朝、急峻（きゅうしゅん）な山あいの里をおおう雲海。息をのむような神秘的な美しさに包まれる里。稲小積みに、干し柿、昔からずっと変わらない、晩秋の里の暮らし風景。そして、今年も神楽の季節がやってきた。山里の集落各地で、それぞれ舞い方も風情も異なる神楽が奉納されていく。シキタリも習わしも違う。その地ならではの暮らしの魅力があり、毎年訪れるファンも多い。

神楽に訪れる旅人にとっての醍醐味（だいごみ）は、地元の人々とふれあい、交流すること。地元の人々の暮らしの一部である神楽を土地の人々と共に祝い、奉納することで地元の人と一体になったと感じられること。自然に感謝し、共生してきた村人たちの生き方は貴重であり、まさに日本人の財産である。

欧米を旅すると、庭園は確かに美しいが木々が立体状に刈り取られていて、明らかに人の手が入っているのが分かる。ロサンゼルスでは日系人の庭師が人気であるが、人々はその良さが、庭をできるだけ自然に見えるように造ってあることにさえ、気がついていない。山頂をめざす登山も欧米の考え方。山頂を制覇し、国旗をたてる。英語で征服という動詞（conquer）を使って表現するだけあって自然は常に征服していくもの。しかし、日本人にとっては、山は信仰の対象であり、人々の暮らしとは昔から深い関係がある。山頂は征服するものでない。むしろ神域を侵すことがないように心を配ってきた。狩りでも、焼き畑でも、山開きでも、山の神への祈りを怠ることはない。これが日本人の生き方であり、継承されてきた文化。

10年前、宮崎県に移り住んだとき、各地にこうした貴重な習慣や伝統が数多く残っていることに驚いた。例えば椎葉の小猟師（こりゅうし）の心構えに「のさらん福は願い申さぬ」という精神がある。必要以上のものはいらない、残ったものは山に帰すという考え方である。究極のエコが、ここに暮らす人々の、敬虔（けいけん）で、地に足がついた生き方には存在する。

このような貴重な生活文化に触れる旅を企画し、参加者の自然に対する意識や生活観を変えていく考え方をエコツーリズムといい、神楽ツーリズムもその一つである。

神楽は、もともと旅行商品でもショーでもない。そのことを忘れ、料金に見合った料理や酒が出ないという場違いな文句もあるというから、迎える側もたいへんである。残念ながら、そんな文句をいう人は、神楽が何であるかを知らない。

神楽は氏神様の村まつりであり、カッポ酒や煮物料理などは年に一度、降臨された神々と里人が一体になる「なおらい」の儀式料理。集落によって儀礼の方法も異なる。神楽に参座した旅人は村人と共に神々をお迎えする立場であり、もてなされる対象ではないのである。神楽ツーリズムとはこうした神楽の考え方を通して、日本人が従来持っていた生き方に触れ、自然と人との関係や、地域について学ぶことができる旅の企画である。

例えば、12月には椎葉村の尾前神楽に参座する2泊3日の旅が企画されている。地元の人々で構成された椎葉村ツーリズムネットワークで取り組んだ神楽ツーリズム。神楽体験と交流を通し、より深い土地の魅力を体感できる旅。西米良村や西都市でも同様の旅が用意されている。地域の人々との心の交流こそが、旅の真髄である。

ふくなが・えいこ　福岡県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業。地域交流誌「みちくさ」編集長。県観光審議会委員。宮崎市。